



出雲崎中学校だより

〈第5号〉

出雲崎町立出雲崎中学校

TEL 0258-78-2137

FAX 0258-78-2164

令和4年12月23日発行

「自律」「慈愛」「挑戦」～2学期の教育活動①～

8月26日(金)からスタートした2学期も、残りあとわずかとなりました。新型コロナウイルス感染症については、未だに予断を許さない状況にあります。学校では感染症対策を徹底しながら、生徒の健やかな学びを保障することを意識して取り組んできました。学習内容や活動内容を工夫し、可能な限り授業や部活動、各種行事等の教育活動を継続する中で、生徒は目標の達成や課題の克服を目指し、様々な場面で前向きに諸活動に取り組み、大きな成果をあげることができました。

創立50周年記念体育祭

9月4日(日)、「一致団結～熱い仲間と最高の思い出を～」をスローガンに、令和4年度の体育祭を実施しました。今年度も、コロナ禍の状況に収束の兆しが見られず、開催にあたって検討しなければならないことが多々ありましたが、昨年度までの経験を生かし、生徒は夏休み前から感染症対策を徹底しながら準備を進めました。競技種目や競技方法についても、生徒会本部役員を始めとする実行委員会のメンバーを中心に検討を重ね、様々なアイデアを出しながら、密を避けてみんなで楽しめるように工夫を凝らし、準備を進めました。それぞれの種目は各委員会が担当し、委員長のリーダーシップのもと、全校生徒一人一人が役割を担い、責任をもって準備・運営にあたりました。限られた時間を有効に活用し、夏休みから軍ごとに集中して準備活動に取り組みました。軍活動でも、赤軍・青軍ともに団長をはじめとする3年生の素晴らしいリードが光りました。



当初は3日(土)の開催予定で準備を進めていたのですが、当日の朝、突然の雨で延期を余儀なくされ、翌日の開催となりました。4日(日)は、前日とは打って変わって日差しが眩しい一日となり、町長様や教育長様をはじめとするご来賓の皆様、いつも生徒を応援してくださっている保護者の皆様をお迎えして、体育祭を開催することができました。競技中は、3年生が上手に後輩を導き、互いに競い合いながらも、応援



し合ったり、讃え合ったりという温かい雰囲気の中で競技が繰り広げられました。1・2年生も3年生の思いに応じてよく頑張り、一体感あふれる一日になりました。学年種目は、1年生「びったり玉入れ」、2年生「釣れ!ギョギョギョリレー」、3年生「打ち抜け!スプラッシュウォーターガン」と、ネーミングも含めてどの学年も独創性のある内容で、競技者も観客も大いに盛り上がりました。軍対抗で競い合いながらも、クラスの仲間同士で楽しんでいる様子が伺えました。全校種目は、「ダッシュ(奪取)で綱引き」「回れ!台風の目」

「全員リレー」の3競技。こちらも、各担当が知恵を絞って創りあげた競技です。各軍が“一致団結”して一生懸命頑張る姿、また、相手と競い合いながらも、互いの健闘を讃え合う姿が印象的でした。昼食休憩をはさみ、体育祭競技の最後を飾ったのは「応援コンクール」。各軍の応援リーダーは、夏休み返上で準備活動に取り組み、応援歌やダンス、隊形づくり等の準備を進めてきました。そして2学期が始まってからの1週間で、軍のメンバーを上手にリードしながら、今日のためにパフォーマンスを創りあげてきました。軍のメンバーも、限られた期間で歌やダンスを覚えるために真剣に練習に打ち込んできました。両軍とも、メンバー全員が心をついに“一致団結”して、一体感のある素晴らしいパフォーマンスを披露しました。

閉会式の感想発表や解団式の挨拶の中で、各軍の団長やリーダーから「最高の思い出になった」「仲間や先生、家族に感謝したい」「今回の経験を今後の生活に生かしたい」といった嬉しい言葉をたくさん聞くことができました。今年度も地域の皆様にお声掛けすることができず残念でしたが、生徒にとって思い出に残る感動的な体育祭になったと思います。また、体育祭の開催にあたり、8月20日(土)に実施したグラウンド除草作業には、早朝から保護者の皆様、民生・児童委員の皆様からもご参加いただきました。多くの方々のご協力に、心より感謝申し上げます。



「わたしの主張」長岡地域地区大会

8月6日(金)に、長岡リリックホールで「令和4年度新潟県少年の主張大会－わたしの主張－長岡地域地区大会」が開催されました。この大会は、中学生が日頃考えている清新かつ建設的な意見を発表する機会を設けるとともに、すべての県民が青少年健全育成に対する理解を深めることを目的として、毎年開催されています。出雲崎中学校からは、3年生・_____さんの主張文を学校代表として応募しました。__さんは、「ひいばあちゃん」との関わりを通して、人との関わり方に思いを巡らせ、人と関わる中で「自分に何ができるか」について深く考えたことを主張文にまとめました。長岡地域(長岡市、小千谷市、見附市、出雲崎町)の代表20名が参加するこの大会で、堂々と自分の主張を発表し、奨励賞を受賞しました。

「何ができるか」

出雲崎中学校 3年 _____



い
な
な
て
が
り
て

「あんた誰だか。」と、ひいばあちゃんに言われた。認知症になったと
うのだ。僕の名前を忘れていた。

この日は、母と一緒にひいばあの家を久しぶりに訪れた。ひいばあは
にとっても会いたがっていた。特に、今のお気に入り兄弟らしい。「弟、名前
なんだっけか。」と聞き、「弟は来んのか。弟はいつだ?」としきりに気にし
ていた。弟は従兄弟の家に遊びに行ったので、来ないことを伝えたのだ
、何度も繰り返し聞いてきた。そして、帰り際、「弟、かわいかったらー。あ
がとう。」と、ひいばあが僕に言うものだから、驚いて母と顔を見合わせ
しまった。

認知症とは、脳の衰えなどの変化で認識能力が落ち、生活に支障が出る状態だ。総務省は、2021年に、36
40万人いる65歳以上の高齢者のうち、600万人、つまり、6人に1人が認知症だと発表している。ひいばあ
は、その一人となったのだ。

以前からひいばあと会うのは嬉しい反面、面倒くささを感じていた。他の用事を優先してしまうこともあった。
「話が通じない」「気力がない」「忘れっぽい」というような、メディアで報じられる症状のひいばあを見て、僕
は、面倒くさいと思ってしまった。しかし、別れ際、幸せを詰め込んだような笑顔で、僕たちを見送ってくれるひい
ばあが、心配になり、お盆くらいは、また会いに来たいとも思った。

その矢先、ひいばあは老人ホームに入所することになった。コロナ禍のため、面会は叶わない。寂しかった。そ
して、ひいばあとの関わりが、かけがえのないものだと思った。

今までの僕には、何ができたであろうか。身内がこのようなときに、これから何をすべきなのか。自分の在り方
を考えた。

誰もがができることは、関わりを増やすことだと思う。例えば、たくさん話をし、より話を聞くことだ。厚生労働
省によると、高齢者の会話頻度は、2、3日に1回以下の人が40.8%で、話す機会が少ない。ひいばあにも、多
少の支援者が付いていたとはいえ、人に会いたがる様子から、人と話す機会があまりなかったと推測できる。母
と話すひいばあは、活気に溢れていた。

次に一緒に遊ぶことも重要だ。遊ぶという子どものようなイメージを持つかも知れないが、集団での遊び、
トランプやジェンガなどは、認知症を軽減させたというデータもある。その人との楽しい時間も過ごせるので一
石二鳥である。そして、可能な限り生活を支援することだ。立ち座りの補助、飲み物の用意など、小さな負担を
少しずつ減らせるようになりたい。

このように、その人ときちんと向き合い、関わる機会を増やし、大切にすることが重要だと思う。

ひいばあとのことを契機に、卒業という別れを目前に控えた僕は、仲間との関わりについても、何ができるか
考えるようになった。

一つは、多くの人と話を聞き合うことだと思う。互いの悩みや考えを伝え合うことで、その悩みを和らげたり、
相手の理解をより深めたりできる。実際に僕も、友達の考えに納得することや、考えさせられることがよくある。

そして、支え合うことも大切だ。ただ、ここで重要なのは、「一方的」にならないことだと思う。誰かと話すとき、
一方的に、話す側、聞く側となっていないだろうか。僕は圧倒的に後者になることが多いが、一方的な役割だけ
では、不和が生じやすい。「話し合う、聞き合う、支え合う」ことで、互いに高め合える関係になると思う。

近年、人工知能の発達で、将来の仕事は減っていくだろうと言われている。しかし、人と関わる仕事、介護士
や先生などはなくなるとも言われている。そういった点でも、人との関わりは人でなければできない重要な
ものなのだ。

今、関わっている人や、これから関わっていく人たちに、「ああすれば良かった」と、思い残すことがないように
したい。そのためにも、ただ関わるだけではなく、誰に対しても「自分に何ができるか」を常に考えて、接してい
こうと思う。